忘れられた血統

紅楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
忘れられた血統

【Ｎコード】
Ｎ０２０４Ｚ

【作者名】
紅楓

【あらすじ】
騎士の国ゼルク。その国の辺境にある村で生活する、十七歳の少年シェルス。
村長の統治で、その村は領地の中でも閉鎖的だった。森の外にさえ、許可が無ければ出られないほど。
ある日、シェルスは幼馴染のエレンと一緒に、こっそりと森の中へ向かった。日が暮れて帰る途中、彼らは不思議な少女と出会う。

かごの中の三人と、一人の子供

「おぉい、ちょっと来てくれ！」
日が陰った森の中、男は小声で鋭く言った。
「なんだ？　キノコに毒があるかどうかが分からないのか？」
「違うって！　ほら、そこをよく見てくれ」
少し先にある樹の陰を指差す。
「ん……？　何もない……って、あ？」
「あれって……子供だよな？」
樹の根元で、何かが動いている。
「あぁ……？　人間……か？」
「あたりまえだろ。あれがうさぎに見えるか……えっ？」
「おい、近くに他の人間はいるか？」
「いや、見てない」
「かごを背負ってるぞ？　どこかから来たんじゃないか」
二人の視線の先には、その体には不釣合いな大きなかごを背負った子供が、今にも倒れそうな足取りで、

しかし確かな一歩を踏み出している。
「……ふらついてるな。あれで帰れるのか」
「まぁ、俺達とは関係ないだろ。食料を集めるぞ」
「分かった……って、おい」
バサッ。
「ちっ、まだ何かあるのか？」
「あの子供、倒れたぞ……起きてこない」
「……近づいてみようか。起きてたら、まあ気にしなければいいだろう」
ガサッガサッ。二人の男は、膝まである草を踏み倒しながら人影のあった場所へ歩いていく。

「おい、大丈夫か？」
「……」
子供は、何も答えなかった。苦しんでいる様子もなく、眠るように倒れている。
「ったく、まだこんなに小さな子供じゃねぇか。」
「ふうむ。このかごの大きさ、こいつに合ってねぇぞ？かごの底が土で汚れてる」
「何が入って……おぉっ！？」
「これは……まだ赤ん坊だな。しかし、こんな小さな子供が三人の赤ん坊を運んできたなんてな」
「とりあえず、村に連れて帰ろうか」
「間違っても村長に食料だなんて言うなよ？」
「まさか。俺だってそこまでバカじゃねぇよ」
二人の男はそれぞれ、子供と、赤ん坊の入っているかごを抱えて歩いていった。

1　日常と不満

「頼むから、注文された剣を持っていくのはやめてくれ」
うわっ！　不意に、肩をつかまれた。ふう、心臓がなくなったかと思った。
「びっくりしたじゃないか！」
「品物の剣が無くなって、びっくりしたのはオレの方だ」
ため息をしながら、呆れがちに言われる。
「ランス……なんでオレには剣を作ってくれないんだ？」
オレは、出来るだけ疑問のこもった目でランスを見つめる。
「あのな、ウチは鍛冶屋なんだから、お前も鍛冶を覚えればいいだろ？」
「けっ！　ランスが教えてくれないからだろ！」
「おいおい、オレは注文があるし忙しいんだ。覚えたいなら、自分で観察してろよ」
オレは肩をすくめる。
「オレはどうして作ってくれないのか、って聞いたんだけどな」
「だからオレは、自分で作れって答えてやっただろ」
「まぁいいか。剣を作りたいんじゃなくて、剣が欲しいんだから」
「そうそう。それで、これはお前のものじゃない」
そう言って、オレの手から剣を奪い取った。ちぇっ。
「シェルス。村を勝手に出たら、村長にひどい目にあわされるんだろ？」
「やめてくれ、あんな奴の事は考えたくもない！」
「じゃあ、村を出て行きたい理由は何だ？」
「……」
「やっぱり、あいつが原因じゃないか」
今オレと話をしているのは、ランス。姓名は無い。拾われたんだ。オレも、ランスも。名前だけは、一緒に拾った手紙に書いてあった

らしい。
「とにかく。鍛冶を覚えたいなら観察して……いや、待て」
なんだ？　ランスは一瞬考え込んだかと思うと、急に明るい声で、
「村長に教えてもらいな」
と、冗談にもならない事を言った。
「ちょ、ちょっと待て！　オレの耳が、おかしくなければ、ランスは今、あの野郎に、頼めって言ったのか？」
オレは一言一言、確認するように言った。
「あぁ、すまん。前の村長だ」
前の……？　あぁ。オレは納得して、うなずいた。
「分かった。頼んでみるよ」
「気を付けて行けよな」
全然心配する様子も無い口調に苦笑しつつ、オレは裏口の戸を開けた。

「えっ……」
「その目つきはなんじゃ。言うのは二度目だが、だめだ」
「そ、村長。だめってどういう……」
「三度目まで言わせる気か？」
「違うって！　だめな理由を教えてくれよ」
オレは今、村長の家にいる。村長といっても今の村長ではなく、一つ前の村長だ。彼を村長と呼ぶべきではないが、オレの心の中では彼が村長だ。だから、オレは彼を村長と呼んでいる。
「ふむ。じゃあ、お前が剣を必要とする理由を教えてくれないか？」
オレはしばらく思い悩んだ後、口を開いた。
「この村を出て行くために。とにかく、オレは剣が欲しいんだ」
「村を出て行くだけなら、剣は必要ないと思うが」
「だから言っただろ。護身用だって」
さっきからずっとこの調子だ。オレがいくら頼み込んでも村長は聞き入れてくれない。……仕方ない。ランスに言われたとおり、作

り方を教えてもらうしか無いみたいだ。
「村長！　せめて、剣の作り方だけでも教えてくれよ！」
「そうじゃな、考えてやろう。だから今日はもう帰れ」
「えっ、今すぐには答えてくれないのかよ？」
「なんにでも、考える時間というものは必要じゃないか。その時間に差はあれど」
　くぅーっ！　仕方ない。これ以上は疲れるだけだからな。
「分かったよ。いつ教えてくれるんだ？」
「わしはまだ教えるなど一言も言ってないんじゃが」
「……じゃあ、いつその答えを聞かせてくれるんだ？」
「分からん。わしの予想では、かなりの日数がかかると予測するが」
「もういい。やっぱりあきらめてランスのを見て覚えるよ」
「最初からそういえばよいものを、まったくお前は……いや、よそう。シェルス、はやく帰れ」
「じゃ、村長。また今度」
「その『今度』は、もう少しましな用件で来て欲しいがな」
　返事をかえす気力もなくなった。オレはきしむドアを開けて外に出ると、慎重にドアを閉めた。だって、強く閉めてドアが壊れたら、ボロボロなドアがこっちに倒れてくるかもしれないだろ？ははは。

「シェールスッ！」
　わあっ！　びっくりした。広場のわきにある樹のそばを通り過ぎた時、その陰からルシィが飛び出してきた。
「何か用か、ルシィ？」
「ええと、ちょっと助けて欲しい事が……」
　ルシィは言葉をにごし、なかなか先を言わない。
「その言葉の先を言えないことを、助けて欲しいのか？」
「ええと・・・怒らない？」
「聞く前に、怒らせないよう努力してくれよ。何の話かも分からないんだから」

「分かったわ。あのね、ペットが逃げちゃったの……」
「悪い、急な用を思い出した。というよりオレはそのために今ここを歩いていたわけで、つまり……」
「もう、やっぱり怒ってるじゃない。そりゃ、何回も頼んで悪かったけど……」
「十三回目だな」
「ううっ、分かってるわよ……」
「本当に。オレははやく家に戻ってやりたいことがあったんだけど……で、今度は何が逃げたんだ？」
「え？あ、逃げちゃったのはオウムの……」
「あきらめるんだな」
言うが早いか、オレは方向を変えて家に歩き出す。
「ちょ、ちょっと！　何で！？」
ルシィは、まさか断られるとは思ってもいなかったとでもいう風についてきた。
「オレに鳥を捕まえろってのか？」
「うん。そういったんだけど……」
「ふうむ……。ルシィ、安心しろ。確か森のはずれに医者がいたはずだから。今すぐ連れてってやるよ」
「わたしを頭のおかしい人と思っているようね……」
「違うのか？　エルフなら鳥を呼べるかもしれないが、オレは人間だぞ。しかも、仮に鳥が寄ってきてくれても、オレじゃ全く同じ鳥は捕まえられないだろ。何でそんなことをオレに頼むんだよ？無茶だ」
「シェルスなら捕まえてくれると思ったから……」
「屋根の上から飛び降りてみようか？　祈りが通じて、羽根が生えるかもしれない。そしたら大空を羽ばたきながらおまえのペットを呼んでやるよ。あちゃ、オレは鳥の言葉を知らないんだった！　ルシィなら知ってるだろ？　ペットと意思の疎通が出来ないわけ無いだろうから……」

「冗談ならやめてよ。本気で言ってるなら、わたしが森のはずれの医者まで連れて行ってあげるわ」
「ううっ、やられた。オレの負けだ」
「もう、わたしは本気で頼んでるのに……」
「もう、オレはあきらめろと言ってるのに……」
真似したのに、ルシィは頬をふくらますだけだった。
「あーぁ、またペット捕まえようっと」
「ルシィに捕まる運命の動物に黙祷」
「シェルス！」
ルシィは散々オレを叩いた後、手を振って家に帰っていった。さあ、オレも早く帰ろうっと。ランスが仕事を終えるまで時間が残ってないからな。急ごう。

「ただい……っ！」
オレはドアノブに手をかけると同時に家の中に飛び込んだ。その結果、ドアに鼻をぶつけるというぶざまな結果になってしまった。いてて。
「うん？　……ドアが可哀想だな。どうしたんだろう」
「オレは透明人間になったおぼえはないんだけど」
「鍛冶を教えてもらえるようになったか？」
ちくしょう！　目と耳で無視されるなんて。
「いや、教えてもらえなかった」
「そうか」
この……この冷たい態度！　ランス、覚えとけよな！　鍛冶を覚えたらまずはおまえから溶鉱炉につっこんで、そして金づちで……。やっぱり、やめとこう。オレはそんな人間じゃないんだ。
「で、仕方なくランスの鍛冶を観察して覚えることになった」
「いや、ちょっとそれは……」
ランスは、ばつが悪そうに、言葉をにごした。
「何だよ！　さっきは自分で観察しろとか言ってたじゃないか」

「あぁ、たしかに言ったよ。でも……今から作る剣は、ダメなんだ」
どういうことだ？オレはランスの顔をのぞいてみる。うーむ、からかっているようにも、だましているようにも、いじわるをしているようでもないな。何と言うか、焦ったような表情だ。そして、少し顔色がくもった気がする。
「今日はもう寝ろ。寝ないというなら寝かしてやるぞ。オレは今、金槌を持っているんだからな。ははは。安心しろ。今度教えてやる」
そういうランスの顔は、いつもの笑顔だった。

う……ん、なんだ。何か聞こえたぞ？　オレは起き上がってあたりを見回した。たいした物もない部屋。隣を見るとベッドがある。あれ、ベッドに人はいないな。一通り見回したあと、自分がどこにいるか見てみる。オレはベッドに座っていた。がんじょうな木の枠に束ねた藁を乗せて、シーツをかぶせた平凡なベッドだ。そしてオレは、その上に毛布を敷いて、毛布をかぶって寝ていた。今は夏だが、そろそろ秋になろうかという季節で、夜は冷え込む。そもそもこの村は大陸の北にあるらしく、冬は寒すぎるくらいだ。
「……さい。……は……」
ベッドにもぐりこんで、毛布を口元まで引き上げた。び、びっくりした……。ようやく落ち着いて、顔を少し出してみると、居間の明かりがついている事が分かった。だれかいるのか？　さいわい、オレが寝ているベッドは居間からは見えない。冷静になったオレは、だれが話をしているのかを知ろうとして息を潜めた。
「とぼけるな！　何度も同じ事を言わせるんじゃない！　おまえが村の外に勝手に出た事は分かっておるんだからな！」
うわっ！　こ、これはびっくりしたなんてもんじゃないぞ？　この声は村長じゃないか！　どうしてあの野郎がうちにいるんだ？待てよ。まさか、今あいつと話をしているのは……。
「あなたこそ何度も同じ事を言わせてるじゃありませんか。私は村の外には出ていません」

やっぱり……。声の主はランスだった。改めて隣のベッドを見てみたが、オレの予想が外れているとは思えない。
「それじゃあ、おまえの鍛冶場においてあった、あの武器はどこへやった！」
「やれやれ、話の分からない人ですね。そろそろ耳が遠くなり始めましたか。あの武器は処分したと言ったじゃありませんか」
「前から、わしに売れと言っていただろう！　なぜ処分する？　どこへやった！」
「なぜかですって？　他の物に作り変えるためですよ。どこへ、という質問にはこう答えましょう。溶鉱炉です」
「違う！　なぜわしに売らなかった！　それに、あれだけの武器を他のものに作り変える？　ありえない話だ！」
「確かに、あの武器をあなたは売ってくれと言っていました。しかし、売った覚えはありません。あなたがどう主張しようと、あれは私の物です。自分のものをどうするかは勝手でしょう」
「なんだと！？　貴様、わしに逆らう気か！」
「あなたに逆らったつもりはありませんし、逆らう気もありません。私は、自分に従っただけです」
「調子にのるなよ、小僧！」
「あなたこそ、そろそろ静かにしてください。そんなに怒鳴っていたら、シェルスが起きてしまいます。もしかしたら、村中から苦情が来るかも知れません」
「そんなことがどうした！　今すぐにでも貴様に罰を与える事も出来るんだぞ！　正直に言え！」
　正反対だな、まったく。起きてしまうって？　はは、もうオレはとっくに目が覚めてるぜ。しかし、なんであいつがいるんだろう。まぁ、オレとしてはあのまま発作をおこしてぽっくりいってくれたらいいのになと思うけど。
　うーむ。会話の続きも気になるし、これじゃ眠れないな。それに、話の結果次第では、ランスが処刑されるかもしれないな。あの村長

じゃやりかねない。
「そろそろ寝てもいいですか。私は疲れました」
ありゃ？　なんだかぼんやりとしてきたぞ？　オレはいつの間にか体を横たえ、重い瞼を閉じかけていた。
「まだわしは答えを受け取っていないぞ！」
「帰ってください。客人は家の主人に従うべきでしょう」
「貴様……！」
おかしい。こんな急に眠くなるなんて。おい、ランス。おまえ、死ぬ……気か……？　あぁ、眠く……。

2　村の外へ

「シェリー、しっかりしてってば！」
「ううっ！　叩くな。頭がガンガンする！」
「この寝ぼすけ！　歩きながら寝ないでよ！」
「やめろ、エレン……。ぐああっ！くそっ。叩くなって！　お、起きてるから！」
「おはよう、シェリー」
「おやすみ……エレン」
「起きなさいっ！！」
「や、やめっ……、そんなにゆすったら、永遠に眠っちまうぞ！」
「寝てる人間が、どうやって眠るのよ！　ちゃんとして！　村長に見つかったらどうするの？」
「うん、そうだな。あいつに見つかったら大変だ。エレン、静かにしろよ。見つかったらどうするんだ？」
「シェリーのせいにするわ」
「……」
　この状況を説明しようか。オレは朝（昼に近い）、エレンに叩き起こされた。エレンは、ルシィと双子の姉妹で、オレ達と同じ孤児だ。しかし、性格はルシィと似ているようで違う。ルシィと比べて大人びてはいるが、その分容赦しない所もある。
　そして、オレはガンガンする頭と、焼けるように痛い目と、重たい体を引きずって外に出た。もしくは、エレンがあらゆる苦痛にうめくオレを引きずって外に出た……というのが正しいだろう。
　つまりオレは、寝起きの頭に降り注ぐような大声を聞きつつ、寒空の下をバシバシ叩かれながら引きずられまいと必死の思いで歩いている。……これでも、この状況の説明は要約している方だ。
「ああっ！　野いちごを摘みに行くだけで、なんでこんな目にあわなきゃいけないんだ？」

「手伝ってくれると言ったでしょう。それに、見つかってもシェリーのせいに出来るわ」
「答えになってないじゃないか！」
ちっくしょう！　自分が大声を出したわけだが、うああ！　頭の中で鐘が鳴ってるみたいだ！
「お？あの二人は……」
「やめろ、やめろ。村長に報告しようなんて考えるな。あんなやつにかかわったら、ロクなことにならねぇぞ。」
「あ、そうだな。はやくいこう」
しまった！　他の人に見つかった。ううむ、まずいな。
「エレン。今オレ達が村の外に出ようとしてるところを見られたぞ」
「平気よ。村長にはいわないって言ってたし」
「……それだけ堂々としてるなら、オレを連れてかなくてもよかっただろ？」
「あら、シェリーがいたほうがたくさん野イチゴを持って帰れるわ」
「オレは荷物持ちか？」
「ええ」
ううっ。オレにはいいことが一つもないのか？　ちぇっ、本当になんだってこんな目にあってるんだ。

「シェリー！　はい、このかご」
「……ほら」
オレは野いちごがいっぱいにつまったかごと、からっぽのかごを交換した。くそっ、荷物持ちだけでなく、イチゴ摘みまでやらされるとは。
「もういいだろ？　十分に取れたし、帰ろうぜ」
「うーん。じゃあ、そのかごをいっぱいにしてちょうだい」
よし！　終わりが見えればやる気も出てくる。オレは葉をゆらす風と競争するかのように素早くかごをいっぱいにした。
「ありがとう！　やっぱり、シェリーはやさしいわね」

この言葉は、少しおかしいな。エレンの人使いが荒い、というべきか。だが、エレンの笑みを見ていると、まあいいかな、と思えてしまう。
「早く帰ろう、疲れた」
オレは思いっきり伸びをする。うーんっ！　あぁ、清々しい解放感だ。
「じゃあ、これ持ってくれる？」
うわっ、忘れてた。オレはぶつぶついいながらかごを持つ。あれっ、なんで半分なんだ？　エレンは、オレの気持ちを察したかのように言った。
「疲れたでしょう？　私が半分持ってあげるわ」
「ふうっ、そうか」
オレ達は並んで森の中を歩く。そうだ、村に帰る時はどうしようか。
「エレン。だれにも見つからないで帰れるかな？」
「シェリーの家の裏から入りましょう。あそこがいちばん見つかりにくいはずよ」
そうだな。オレの家は、森のすぐ近くにある。しかも、そこまで来る人はほとんどいない。ふむ、オレの家から出てきてもだれも不審に思わないだろう。エレンにしては、なかなかうまく考えてたようだな。
ここまでくれば、オレの家はもうすぐだ。子供の頃から、このあたりで遊んでいたからな。村長があいつにかわるまで。
グルルルル……。
「あら、何の音かしら？」
ガルルルル……グルル……。
「風が枝をゆらした訳じゃなさそうだ。エレン、急げっ」
「えっ？　ちょっと、なんなの？」
「オオカミだ！　くそっ、なんでこんなところに！」
「シェリー！　前にっ、前にもっ！！」

グルルウ……。しまった！　どうやらのんびり歩いていたせいか、オオカミに包囲されていたようだ。
「ちっくしょう、どうしようもないが、やつらの晩餐になるよりはましだろう。エレン、隙が出来たらすぐに村へ走れ！」
「隙って……そんなの、出来るの？」
オレは、ちょうど足元にあった棒切れと石ころを拾った。……ちっ、情けないけど、手が目に見えるほど震えている。
「……やってみるさ！」

「グルルルル……」
「ウルルルル……」
オオカミ達は、徐々に迫ってくる。血に濡れた牙、殺気を帯びた目。気が狂いそうだ。腕がガタガタ震える。
「シェリー、大丈夫なの？　このままじゃ、やられちゃうんじゃない？」
エレンの言う通りだ。しかし、オレが何か出来るかというと、何もない。思いついたとしても、持っている石ころをぶつけるくらい……。
「くそったれ！　どうせこんなことしか出来ないだろ！」
「ギャンッ！」
オレの投げた石ころは、うまくオオカミの足に当たった。
さあ、怒っただろ？　驚いたんだろ？お前達は、一斉にオレ達を襲って…オレ達はお前達の餌に、なる。ううう。ちっくしょう。
しかし、オオカミ達は襲っては来なかった。そして、代わりに遠吠えを始めた。
「ウオオォォ……ン」
「オオオオォォォーン……」
しばらくして、大きなオオカミが現れた。奴がボスなんだろう。オオカミは、こちらの様子を見るかのように距離を取っている。
そのボス（と、思われる）オオカミの目は怪しく光っている。…

…あんな目をしたオオカミなんて、聞いたことが無いぞ！
背筋がぞっとし、冷や汗が止まらない。オレは、このオオカミに太刀打ち出来ないと断言できる気がする。……いや、ほかのオオカミに対しても、勝てる気がしないが。
オオカミの瞳が、ひときわ強く輝いた。オレが身構えた瞬間、持っていた棒きれが粉々にはじけた。
「シェリー！」
エレンが叫んだ。オレは、大丈夫だと答えようと振り返った。ただ、そんな余裕を持ちあわせてはいなかったが。
そして、オレの目の前を何かが、きらり、と横切った。
「ギャイン！」
ボスオオカミの悲鳴が合図になったかのように、周りのオオカミは一斉に逃げ出した。一体、何だったんだ？　飛んできたものは、ナイフのような物だった気がする。
オレはとうとう尻もちをついてしまった。
シュシュシュッ！
すると今度は、オレの頭上を、その光るものが飛び抜けていった。空気を裂きながら飛んでいったそれは、オオカミを切り裂き、つらぬき、突き刺さった。
あまりの光景に、一瞬目をつぶり、そして開けた。じっと見てみると、それはガラスのようだった。いや……氷、か？
振り返ってみると、エレンはオレと同じように座りこみ、後ろを見ていた。
誘われるように、その方向をみてみると、そこには見たこともない少女がいた。
「……」
沈黙。目が合った。オレは未だに状況が飲み込めず、もう一度オオカミを見た。
オオカミは相変わらず無様な姿で倒れている。怪しく輝いていた

瞳は光を失っていた。
そして、突き刺さっている氷の刃。
「あ……これ、君がやったのか？」
どうにか見つけた話題は、こくり、と少女が頷いてまた途切れてしまった。
「あの、助けてくれてありがとう」
エレンがそう口にし、オレはしまった、と思った。彼女がオレ達も襲ってきたらどうする？　たった今、目の前で刻まれるオオカミを見たせいか、足に力が入らなかった。
しかし、少女はまたしても、こくり、と頷くだけだった。
ふいに少女が、腕を上げた。その腕はオレ達の方向に向けられている。周りに霧が発生し、その中から氷の欠片が幾つも出来た。
氷の刃は、ものすごいスピードで迫ってくる。
「うわあっ！」
オレは、思わず伏せた。しかし、氷の刃は、オレとエレンの間を通り抜けていっただけだった。
「ギャウッ！」
何、まだいたのか！？　しかし、悲鳴を上げたのは新たなオオカミではなく、あの、目が光っているオオカミだった。

オオカミは頭を振った。その瞳は、強く輝き続けている。
「グルルルル……。グワアアッ！」
うわ、飛んだっ！　オオカミは跳躍し、オレ達に向かって襲いかかろうとしている。ちくしょう、オレ達、死ぬのか？
そんなことを考えていると、再び氷の刃が背後から飛び出した。シャシャシャシャッ！
「ギャウウッ！」
オオカミは怯んだが、氷の刃は容赦なくオオカミに襲い掛かった。
オレは少女の方を振り返った。少女は腕をオオカミに向け、ただじっとしているだけだ。しかし、少女の周りには、無数の氷の刃が

現れては飛んでいく。幻想的な光景だ。さっきは、急なことで分からなかったが、よくみると氷の刃が現れる時、空気が凍っているように見える。かなりの数があるから、少女の周りは霧に包まれ、それを夕日の光が反射して美しい。
オレはこの状況を忘れ、ただぼーっと少女の姿を見つめた。
「グギャアアッ」
びくっとして視線を戻す。オオカミは恐ろしい鳴き声をあげている。氷の刃は、やむことのない雨のように降り注いでいる。
ふと、服の裾を引っ張る感触を感じた。
「シェリー……」
エレンだ。どうやら、不安になって落ち着かないらしい。オレは頭をなでてなだめてやる。
「心配するなよ、大丈夫だって……多分」
オレ自身、どうなるか分からず、言葉の最後は自信がなくなってしまった。
気がつくと、オオカミはうなりながら毛を逆立てている。少女の方も、腕を下ろし普通に立っている。そのときだ。
「離れて」
誰だ？　振り返ると、少女がこちらを見ていた。初めて声を聞いたな。しかし、そんなことは気にならず、オレ達はただ言われたとおりにした。
オオカミと少女が対峙しているのが、いっぺんに見える。当事者から傍観者になったオレ達は、ぽかんとして目の前の戦いを見つめた。
「……」
少女が何かをつぶやきはじめた。何だろう？　しかし、声は全く聞こえてこない。口は動いてるはずなのに……。そんなことを考えていると、少女が小さく叫んだ。
「ファイヤーボール！」
ゴオオッ！突然現れた火球は、草を焼きながらオオカミに向かっ

て飛んでいく。
魔法か！？　オレは呆然とし、その信じられない光景を見つめた。
「ウウウー……」
オオカミの目が光った。すると、火球は消えてしまった。今度は何だ？　もう、何が起きても驚くしかないから、何でもこいという覚悟だ。
「グアアッ！」
う、嘘だろ……。オオカミの目がまた光ったかと思うと、今度はオオカミを中心にして炎が広がり始めた。つまり、森を焼く炎が、その勢いでオレ達に迫ってくるということだ。
「うわあああっ！」
オレ達は、あわてて逃げ出そうとした。ふと、少女を見た。逃げるなら彼女も連れて行かなければ！
少女は、少しあわてた表情だった。しかし、またしばらく口を動かすと、すぐに叫んだ。
「ウォール・オブ・アイス！」
ザザザーッシャシャシャッ！
あまりに状況が急転しすぎて、混乱してきた。目の前に、巨大な氷の壁が現れ、オオカミもろとも炎を飲み込んでしまった。炎は消え、オオカミがどうなったかは分からない。
結局、オレとエレンは、呆然と立ち尽くすほかなかった。

ガシャシャアアン……。
少し経つと氷の壁は崩れ、氷づけにされたオオカミは、今度こそ動かなくなっていた。
「……大丈夫だった？」
氷の破片と砂が舞う中、少女がこちらに歩いてきた。
「大丈夫……だけど、今のは一体なんだったんだ？」
どうにか声を出したオレは、未だ残っている氷をちらり、と見やった。少女は、今度は頷かず、ちゃんと答えてくれた。

「気付いてると思うけど、魔法よ」
「本当に、魔法なのか？」
信じられない！　まさかオレが、この目で本物の魔法を目にするとは！
「ええ。ところで、あのオオカミは何故こんな所に？」
そうして少女は、オオカミを指さした。瞳の光は完全になくなり、ぼろぼろになった亡骸があるだけだ。
「どうしてって……。オレ達もわからないよ。気がついたら、突然オオカミに囲まれていたんだ」
「周りに、他の人間はいないようだけど……」
「あ、それは、この近くに村があるんだけど、村人はみんなそこから出るなって言われてるからだ」
「そう……。ところで、あなたもその村人のようだけど。どうしてここにいるの？」
「それはもちろん、こっそりと……」
エレンにわき腹を小突かれて思いとどまった。いてて……。そんなに強く小突く事はないんじゃないか？
「ちょっといいかしら？　わたしはエレン。あなたの名前は？」
「え？　ああ。……フィリスよ」
「そう。この人の名前はシェリーよ」
「シェルスだ」
フィリスはくすっと笑った。なんだかバカにされた気が、しないでもない。
「ねえ。これから村に戻るんでしょう？　……わたしも、連れて行ってくれない？」
ふむ、どうしようか。エレンの方を見ると、嫌がる様子はまったく見えなかった。オレも、命の恩人だし構わないと思うが、問題は村に入ってからのことだ。
エレンが、オレの考えを察したように、言った。
「わたし達が無事にもどれるなら、彼女だって一緒に入れるはずよ。

それに、そのあとどうするかは……ランスに頼んでみたら？」
「なるほど。とりあえず、急いでもどらないと面倒な事になるってことか」
そうと決まれば急ごう。エレンは、フィリスの手をとって進もうとした。フィリスも、引っ張られて倒れそうになりながら進んだ。
しかし、フィリスは立ち止まり、恥ずかしそうに呟いた。
「あの、村に行く前に、その野いちご……少し、ちょうだい」
オレ達は笑いながら、かごにいっぱい入った野いちごを命の恩人に差し出した。フィリスは少しつまんで口に入れると、恥ずかしげに頬を染め、オレ達に「ありがとう」と小さく言った。

3　新しい同居人

「ふむ……どうしようか」
ランスは、手をあごにあてて考えてるようだ。
オレ達はあれから、すぐに戻ってきた。予定通りオレの家の裏から出てきたあと、何食わぬ顔で広場に戻るより先に、家の中に入ってランスに助けを求めた。
「えっと、つまり、この子が村長にバレないようにするんだよな？」
「ああ、オレ達は森の外に出ていたから、彼女がここにいる理由を説明できないんだ」
「『こいつとはどこで会った？　ふん、知らぬ顔だが。外から入ってきたよそ者じゃないか！』なんて風に言うんだろうな、村長は」
「で、エレン。シェルスの説明じゃよく分からんから、もう一度森での出来事を詳しく教えてくれ」
オレは頬を膨らませてランスをにらんだが、まるで気にしてない様子だ。エレンも、素知らぬ顔で話し始めた。なんだよ、もう。
フィリスが現れたところまでエレンが話し終えると、ランスは目を丸くした。そういえば、オレは簡潔に今までのことを話しただけだったな。よく分からないと、言われてもしかたないじゃないか。
「氷が……？」
「ええ、どこからともなく現れて、オオカミに飛んでいったの。そのおかげで、わたし達は助かったの」
「……分かったよ。続けてくれ」
そして、フィリスが火球を飛ばしたこと、オオカミが森を焼いたこと、氷の壁でオオカミが氷づけになったこと、まで聞くと、ランスはまた話をさえぎった。
「待て、魔法だって？」
「本当だぜ。フィリスが魔法だって、自分でいってたよ」
「もう一つ聞いていいか？」

「うん？」
「その火球……ファイヤーボールか？　あとは、ウォール・オブ・アイス、だな。その魔法を使った時、彼女は呪文を唱えていたか？」
「ああ、そんな名前を叫んでたよ。ところで、呪文って？」
　オレは、ランスが的確な質問をしてくることよりも、あの説明で魔法の名前を当てたことに、驚いた。
「あれ、魔法を放つ前に口が動いてなかったか？」
「あ！　あれか。聞こえてこないし、不思議だったんだよ。あれ、呪文って言うのか？」
「そうだ。だが、ルーン語だから聞き取れないし、理解も出来ないだろうな」
「ルーン語？　それより、何でそんなに詳しいんだよ？」
　ランスは、一瞬はっとした表情になったが、すぐにもとの表情になった。
「い、いや、関係ないさ。それに、おまえにもいつか知る時が来るだろうよ」
「怪しいぞ、ランス。何かとんでもない事を隠しているんじゃないだろうな？」
「身の完全な潔白を証明できる人間なんて、いないんじゃないか？　で、質問していいか？」
「ええ、いいわよ」
　エレンが、あわてて割って入ってきた。けっ、そんなにオレに答えさせたくないのか？　どれだけ役立たずな説明だと思ってるんだ。
「氷の刃を飛ばした時は無言だったそうだが、本当に、何も呟いてなかったのか？」
「うん、腕でオオカミをさすだけで、動かなかったし何も言ってなかったわよ」
「そうか……」
「さっきから気になってたけど、それがどうしたの？」
「いや、気にするな。オレ個人の質問だよ。じゃあ、彼女をかくま

う準備をしないとな」
　そういってランスは立ち上がった。あわててオレ達もあとを追う。
「準備って？　オレ達、何も聞いてないぞ？」
「なあに、普通に暮らしてりゃ不審に思われないだろ？　あとは、夜寝てる時に見つからなければ良いんだ」
「それってどういう……」
「そうだな、彼女のベッドはお前の隣でいいな？」
　えっ？　ランスは考えるふりをし、それ以外に選択肢がないという風にいってきた。しかし……隣とは。エレンが、こちらを見ているのが分かる。
「ちょ、ちょっと待ってくれよ！　詳細な説明を要求する！　これは不当な決定だ！」
「まったく……嫌な気はしてないだろ？　ふむ、まず、オレとお前の寝ている寝室が、窓もなく一番外から遠い」
「あ、ああ」
「仮に家の中を覗かれて、オレが他の部屋で寝ていても、まったく不審に思われない」
「……」
「だから、オレが他の部屋で寝て、彼女に元々の場所をゆずればいい」
　こんな、強引な正論が通ってよいものか！　しかし、嫌がる理由はないし、徹底的に拒否すれば、フィリスにも失礼な気がしたから、オレはその提案を受け入れるしかなかった。だけど、オレに反論くらいはさせてくれよ！
「でも、それだけじゃ結局安全とはいえないだろ？　朝や昼に家の中に入ってくる人だっているんだから。特に、ウチは鍛冶屋なんだから、注文だって色々来るじゃないか」
「それは、師匠に頼む」
「……え、何だって？」
「あ、えっと、気にするな。前の村長にだよ」

「ああ、うん、分かった。でも、何を頼むんだ？」
「正式に、彼女をここの村人にしてもらう」
「えっ」
「ここの村人になるなら、あいつだってよそ者だとかって文句を言ってこないさ」
「それはどうだろう」

「それじゃ、エレン。問題も片付いたし、そろそろ帰ったらどうだ？　ルシィもきっと心配してるだろうしな」
「あっ、忘れてた！　シェルス、じゃあね！」
そういうが早いか、エレンは家の外に飛び出していった。
「あ、おい！　かご、一つ忘れて行ってるぞ！」
「それは、シェルスの分！　……フィリスにもあげなよ！」
もうエレンは見えなくなった。足は速いんだよな、あいつ。ランスは、寝室へ向かって歩いていった。オレも、後をついていく。
「さて、シェルス。もうそろそろ夜になるが……どうする？　バレないようにベッドを作るか、お前と彼女で一緒に寝るか」
「作る！　もしくは床で寝る！　……いや、やっぱり作る！」
床で寝たとしたら……。明日の朝、体が動かなくなるだろう。
「やれやれ、しょうがないな。バレるかもしれないから、あんまり音を響かせたくないんだが。……本当に、一緒に寝るのは嫌なのか？」
「そりゃそうだろ！」
「ふむ。だそうだ、フィリス」
えっ……？　ランスは寝室のドアをあけて、そういった。フィリスが、ロウソクの薄明かりの中、ベッドに軽く腰掛けているのが見える。
「ふふ、シェルス。私のこと、そんなに嫌いなの？」
フィリスはにこっと笑い、そう聞いてきた。
「いや、そういう訳じゃ……ああっ！　ランス、どうにかしてくれ

よ！」
「オレ？　そうだな、シェルス、がんばってベッドを作ってくれ」
「なんだって？」
「フィリスと一緒に寝るのはだめ、床もダメなら、がんばってフィリスの分のベッドを作ってくれ」
　ううっ、結局作るしかないのか。
「ランスは手伝ってくれないのか？」
「オレはお前がどうしようと構わないしな。床で寝ようと、添い寝しようと。……第四の選択肢。オレと一緒に寝るか？」
「ふざけるなよっ！」
「あははははっ」
　ランスは爆笑し、フィリスもくすくす笑っている。ああ……おかしくなりそうだ。ちくしょう、ランスめ！　とことんからかいやがって！　ランスはまだ笑いが止まらない様子で、部屋から出て行ってからも時折、笑いを堪える様子が伝わってくる。オレはため息をつき、どうしようか考えた。……ベッドを作るに決まってるけど。
　ちらり、とフィリスを見た。彼女は、微笑んでこちらを見ているだけだ。なんだか、一緒に寝ても構わない……かな？
　オレは頭をブンブンと振り雑念を追い出してから、ベッドを作る作業に取り掛かった。

「まさか……オレ達と同じ、なのか？」
　オレは部屋から出たあと、フィリスについて考えてみた。魔法を使う少女。それだけでも特別な存在だ。しかも、ウォール・オブ・アイスとは……。それだけの魔力が、彼女にはある。しかし、オレが気になっているのは、そこじゃない。
　呪文も、始動語も言わない。ただ腕を動かすだけで、氷の刃を作り出したという。もしかしたら……。エレン達に聞いたのが事実で、彼女がもし、オレ達と同じだとしたら……。

「奴に知られたら、やばいかもな……」
オレは、この村で過ごすことになってから、あの力を一度も使っていない。そして……シェルスは、まだその力に気付いていない。エレンも、ルシィも、まだ大丈夫だろう。だが、それも時間の問題だ。
師匠は、彼自身もマナをあやつる魔術師だ。だからこそ、オレ達に理解を示し、この村においてくれた。だが、奴は違う。騎士道を重んじる、古参の騎士。引退したと聞いたが……。この村の村長になったのも、騎士の国であるこのゼルクの国内で魔法使いが村を治めるのを許せなかったからだろう。
魔術師の彼に従っていた村人達も、奴の目には騎士道を軽んじる人間に見えるようだ。だから村人に対しても奴は容赦ない。森の外に村人を出させないのは……。推測だが、何かあいつにとって知られたくないものが村の外にあるのかもしれない。いや、あくまで推測だが。
明日には、師匠に知らせに行こう。そして助けを求めてみるか。どうしたら、彼女の力と、森での事実を奴から隠しとおせるか。正式に住人にするだけじゃ、彼女を守れそうにない。

うっ、まぶしいな……。オレは体を起こし、少しでも眩しい光から逃れようと顔を伏せた。頭が重い。あれから、寝るに寝れなかった。寝ておかないと、重要な事態になった時、対応できなくなる。しかし、分かっていても頭の中では自分で解決策を見出そうとずっと考えていた。
そろそろ目が慣れてきただろうか。オレは顔を上げ、周りを見渡した。窓……？　そうか、フィリスが来たから、オレは寝室からベッドを引きずってきて、予備の部屋に運んだんだ。
シェルスは……どうなったかな。オレはベッドを取りに行った時に寝室に入ったきりだ。そのときは、まだシェルスが材料を前に悩んでいる最中だった。

ベッドから下りて、服を着替えた。ふむ、クローゼットも新しく作ってここに置こうか。棚も一つ二つ必要かな。フィリスも、しばらく一緒に暮らすだろうし、いちいち物を取りに寝室まで行くのも面倒だ。

リビングに行き、用意してあった朝食を温める。少し冷たくなったスープの入った鍋を火にかけ、寝室へ足を運んだ。

「どうなってるかな……？」

そっとドアを開け、中をのぞいてみる。ベッドが二つ。シェルスは、どうにかフィリスの分のベッドを作り終えたようだ。しかし、ベッドとベッドの距離はあまり離れてなく、二人ともそれぞれ平和そうに眠っている。なんだ、一緒に寝るのは嫌だと言っていたくせに、近くで眠っているじゃないか。……いや、フィリスが近づけたようだな。それにしても、昨日のシェルスが戸惑ってる姿は、かなり面白かった。

オレはまた爆笑しそうになり、笑いを堪えたあと、音を立てないようにドアを閉め、リビングでくくくっと笑った。

熱々のスープを飲んで、オレは出かける準備をした。もちろん、持って行くものなんてない。しかし、夏といってもそろそろ秋にさしかかる季節だ。それに、まだ朝だから。コートくらい羽織っていったほうがよさそうだな。

さあ行こう。ドアに手をかけたところで、少しいたずらを思いついた。外に出て、振り返る。そして思いっきり腕を引き……。

バタン！　大きな音を立てて、ドアは閉まった。これで起きてくれたらいいんだけどな。オレはふうっと息を吐き、村の反対側へ向けて歩き出した。

バタン！　ものすごく大きな音が聞こえた。

「うわあっ！」

オレは飛び起きた。……何の音だ？　思わず飛び起きてしまった

が、何も異変は見当たらない。
「ふうっ、なんだよ」
オレはため息をつき、もう一度毛布を引っ張り上げ、寝ようとした。そのとき、ベッドに横になりながら、こちらを見ている少女に気付いた。
「えっと……あ、フィリス、か」
思い出した。頭がぼんやりしている。たしか、昨日の夜、ベッドを作って……。そうだ、思い出した。どうにか静かにベッドを作り終えたオレは、ベッドにわらを詰め、毛布をかけてやったんだ。それでそのあと、すぐに寝て……。あれっ？
「何で、こんなに、近いんだ？」
おかしい。寝る前は、前にランスが寝ていた位置にベッドを置いた。しかし、今はもう少しでベッドがぶつかりそうなくらい、近づいている。そのせいで、部屋の片側にベッドが偏っている。
「おはよう、シェルス」
フィリスはもう起きていた様だ。むくっと起き上がり、髪を手でとかしている。少し赤髪が混じっているオレの髪とは違い、フィリスの髪は黒髪だ。昨日は結んでいたが、今は寝ていたせいか、髪をおろしている。
こうして見てみると、かわいい顔立ちをしている。目鼻も整っていて、唇は薄くもないし、厚くもない。そして、ぼんやりとした明るみの中、髪をとかしている姿は……。
気がつくと、フィリスがこちらを向いていた。
「シェルス？　どうかしたの？」
しまった。オレはバカみたいに見入ってしまったようだ。すると、フィリスはまた少し意地悪な表情をした。
「わたしに見とれていたのかしら？」
とん、とオレのベッドに手を付き、顔を近づけてきた。うわあ！
フィリスは、森であった時とは全然違い、ずいぶんとおしゃべりで、からかったりしてくる。

昨日の夜だって、オレがベッドを作っている間、オレのベッドに腰掛け、「ベッドは明日でいいから、一緒に寝ましょう」だとか、「隣で寝たいな」だとか、いろいろからかってきて、オレはもう発狂寸前だった。きっと、ベッドが近づいているのだって、オレが寝たあとフィリスが近づけたんだろう。まったく、そんなに人をからかって楽しいか？

「もうやめろって。それより、早く朝飯食おうぜ」

鍋にスープが用意してあったはずだ。

「あーんしてあげよっか？」

「だからいい加減にしろって！」

ああ……ずっとこんな調子だったら、嫌だな。　……いや、どうだろう。

テーブルについたオレは、ほかの事を気にしないように、一心不乱にスープを飲んだ。そうでもしないと、隙あらばフィリスが余計な事を言ってくるからだ。

「ごちそうさま」

そういって一息つき、フィリスを見た。彼女の皿は、もう空っぽだった。

「もう食べたのか？」

「ええ、おなかがすいてたから」

「へえ……そういえば、野いちごがまだ残ってたな。食べるか？」

「食べる！」

オレは呆れてフィリスを見つめた。彼女も、少ししてから赤くなり、言った。

「ええと、その、まだおなかすいてるから」

「はは、いいって。いちごが好きなんだ？」

「果物はだいたい……」

「ふうん。ところで、フィリスはどこから来たんだ？」

「え？　森の外」

「……の、どこから来たんだ？」
オレは野いちごの入ったかごを机に置いた。フィリスは黙っていたが、しばらくして、口を開いた。
「言えないわ」
「そうか」
フィリスは、えっ、とこちらを見た。
「何も言わないの？」
「それほど気になったわけじゃないからな。それに、どこだって言われても、そこがどういうところだとか、どこにあるだとかはまったく知らないし」
「そう……」
フィリスはしばらく黙り込み、不意に口を開いた。
「実は、分からないの。気がついたら、あの森の中を彷徨ってて。そこで偶然、あなたたちを見つけたの」
「そうか」
そして、その時になってランスが見当たらない事に気付いた。
「あれ？　まだ寝てるのか？」
そう言って、ランスがベッドを運んでいった部屋に入った。
ベッドがぽつんとあり、着替えだとかがいくつかベッドに上にあるだけで、特に何もない。そして肝心のランスはすでにベッドの中にはいなかった。
「どこに行ったんだろう」
フィリスがオレの肩に手を置き、うしろからぴとっとくっついてきた。
「ねえ、村の中を案内してくれない？」
「うわっ！　やめろって！」
オレはあわててフィリスを振り払い、言った。
「まだフィリスは他の奴にバレちゃいけないんだ。だから、まだ村の案内は出来ない」
「そっか。あーあ、なんだか退屈ね」

フィリスは、倒れこむように椅子に座った。
「シェルスー！」
外から叫ぶ声が聞こえる。窓から見てみると、ルシィだった。隣にはエレンもいる。
「誰かしら？」
「エレンだ。ほら、昨日一緒にいた。あとは、エレンの姉妹のルシィ」
ドアを開けるなり、ルシィが飛び込んできた。
「本当だっ！　エレンの言うとおり、シェルスが女の子と一緒だ！」
「……エレン、お前、何かとんでもない勘違いを招いただろっ！」
「あら、だって本当のことを言っただけじゃない」
「必要なことを言わずに、どうでもいいことだけを教えたんじゃないか？」
「わ！　頭いいわね、シェリーって！」
これは……頭の痛いことになった。ルシィは相変わらず驚きと困惑が混ざった視線で見てくるし、エレンはルシィに余計な事を言ったにも関わらず、しれっとしている。さらに、フィリスは……。
「ええ。昨日の夜なんて、隣で寝たのよ」
この状況を、＜絶体絶命＞という沼に次々と投げ込んでいる。ちくしょう、ランス、何でこんな時にいないんだ！
だが、そんな祈りも、ランスのせいでこうなった事を思い出してからやめた。ちっ。

結局、オレは地獄のようになった家を抜け出し、村をぶらぶら散歩することにした。フィリスは、「一緒についていきたい」といったが、オレは何とか説得に成功し、今こうやって一人で歩いているというわけだ。
どうしようか……村長の所に行こうかな。
昨日、ランスに言われただけで、いつ会いに行くかは教えられていない。しかし、オレが一人で行ってもいいのか分からない。ラン

スに全部任せた方がいいんじゃないか？そんなことを考えながらも、オレの足は村長の家へ向かっていた。
　そして今、オレは村長の家の前にいる。階段も上り、あとはドアを開けるだけだ。しかし、手は言う事を聞かず、まるでドアノブに届かない。理由？　簡単さ。家の中から声が聞こえてくる。ただ単に人がいるというのなら構わない。ただ、その声がオレの知っている人間だという事が問題だ。
「お願いします、オレ達の時もどうにかしてくれたじゃありませんか」
「無理じゃ。あの時は、わしが村長だったからどうにかなった。しかし、それでもあいつの反発はひどかった。ましてや、今はあいつが村長じゃ。わしの力では無理じゃよ」
「そんな！　頼みますよ。あなたしかオレ達には頼れる人がいないんだ！」
　どうなってるんだ？オレはそろりそろりと、壁を伝っていき、窓からひょっこりと顔をのぞかせた。
「じゃあ、彼女はどうなるんですか？　まさか、追い出せと……？」
「そうは言わん。しかし、どうしようもないんじゃ。どうにか、お前たちでかくまってやってくれ」
「せめて！　せめて、領主様に頼んでみるだけでも！」
「それであいつに、その娘の存在を感づかれるかもしれん」
「でも！　何とかしないと……」
　ランスは、村長に向かって叫び、村長は悔しそうに首を振っている。彼も、フィリスを助けたいという気持ちはあるんだろう。ただ、ランスが叫んでいるのが気になった。何であんなに必死になってるんだ？もう少ししっかり見ようと、つま先立ちになって覗き込んだ。
「あなたは、村長の座を追い出されるだけですんだけど、オレ達はそうはいかないんだ！　最悪、殺されるかもしれない！　この力は、他の人間にバレてはいけないんだ！」
　何の話だ？　村長も、ランスの言葉に目を見開いている。

「何だって？」
「……いえ、何でもありません。少し、口が過ぎたようです。言いたい事はすべて言いました。あとは、あなたがどうにかしてくれればいいんですけどね……。いや、無理だったら構いませんが」
「ふむ……どうにか、バレない程度にやってみようか」
「オレは、あなたの権力あれば出来ると思うんですがね。では」
大変だ！　オレは、ぼーっとランスの話を聞いていたが、はっと我に返って、思わず足を踏み外してしまった。
ガダダダーンッ！
「誰だっ！？」
ドアの開く音。足音がこちらに近づいてくる。
「シェルス……？」
「あ、ははは……はは」
見つかってしまった。
「……聞いたのか？」
「ああ、うん。少しだけ聞いた。よく意味が分からなかったけど。どういうことだ？」
「気にするな。関わらない方がいい」
「はあっ！？　なんだよ、隠し事か？」
「ああ」
肯定されるとは思わなかった。オレは呆然とし、ランスは立ち止まったオレを気にも留めず、そのまま歩いていってしまった。
それにしても、何の話だったんだろう。殺される？　この力？　まったく分からない。くそっ！　何の話だよ！
殺されるって？　フィリスが？　この力？　魔法か？
イライラする。分からない事だらけだ。
「ちっ、戻るか。……ランスは、帰ってるのかな」
いたとしても、何も話してはくれないだろう。しかし、戻ったとしても……。あの話を聞いたあとだけに、フィリスに視線を向けられない気がする。それで、無駄に気を遣わせるだけなら、会わない

ほうがマシじゃないか。
オレは、気が落ち着くまでその辺を歩いている事にした。

シェルスに疑問を持たれてしまった。これから、どれだけ隠し通せるだろうか。だが、この力のことは知らない方が良いんだ！　そう思っても、オレに対する疑問は深まるばかりだろう。きっと、何を隠しているのかと、探られてしまう。そうなった時、オレはシェルスにあのことを隠し通せるだろうか？　自信がない。一つ確かな事は、この事を知ったら、シェルスは不幸にとりつかれるという事だ。

「はあーっ……」

コートが煩わしくなってきた。それもそうだ。そろそろ昼になるからな。オレはコートを脱いで腕にかけると、あたりを見回した。どうやら、何も考えずに歩いていたせいでおかしな所に出てしまったようだ。急いで引き返す。ここは……奴の家の近くだ。見つかる前に逃げないと。

「おいっ！　お前、何故ここに来た！」

「え？」

改めて、今気がついたという風に返事をする。

「ランス、お前はわしになにか用か？」

「いいえ、散歩ですよ。適当にぼーっとして歩いていたらここに出てしまったようで」

愛想笑いを浮かべる。ただ、ずっと続けていると、心の中が現れるのか、しかめっ面になりそうだ。顔を引きつらせながら笑うというのは……。オレは愛想笑いをやめ、真顔で接する事にした。

「お前、いつも思うが、気に食わんやつだ」

「奇遇ですね、私もそう思っていたところです。私たち、相性が良いんでしょうか？」

「一緒にするな。わしとお前はまったく違う」

「違いすぎるものは、むしろお互いをひきつけあうという……」
「いい加減にしろ。用もないなら、さっさと失せろ」
「ええ、そのつもりです。だから急いで戻ろうとしたのに、あなたに引き止められたので。何か私に用ですか？」
心にもないことを言っている。オレは心の中で舌を出し、奴につばを吐きかけた。くそったれ。
「ふざけるな。お前と戯れる気はない。いいから行け」
「分かりましたよ……。ええ、心から反省してます。少し、冗談が過ぎました」
そして、背を向けて歩き出す。しかし、また心の中が現れてしまった。オレは肩をすくめ、言った。
「心にもないことを言いました。」
オレは、少々自制がきかないようだな。
「そういえば」
うっ、まだ何かあるのか？
「森で、急に煙が上がったり、何かが崩れる音がしたそうだが」
「へえ、そうなんですか」
やばい。感づかれているかもしれない。奴はなおも、探りを入れるように話し続ける。
「オオカミの遠吠えも聞こえたそうだ。……お前の家、森に近いだろう。何か知らないか？」
「いえ、何も」
「では、あの小僧はどこにいた？」
「家で普通に過ごしていましたよ」
「本当か？」
「本当です」
くそっ、オレに向ける視線が、徐々に険しくなってくる。
「……それが、オレに対する用件ですか？」
「お前とは戯れんといっただろう。知らぬのならよい。とっとと失せろ」

「今度こそ、引き止めないでくださいね。次引き止めたら、三回目ですよ」
呆れた様子でにらまれるだけで、特に何も言われなかった。ふうっ、良かった。オレは広場へ向けて歩きはじめた。どうやら、本当に不思議に思って聞いてきただけのようだった。
とにかく、隠し通せた事は良かった。これで、とりあえずは不審がられないだろう。
「隠し事って、つらいな」
思わず、呟いた。呟かずにはいられなかった。これからのシェルス達との関わり方を考えると、気持ちが沈んでくる。

「まだ帰ってないのか？」
オレは家に帰ったあと、フィリスに聞いた。ランスは、まだ帰ってないのだという。
「ええ、さっきまで、エレンとルシィがいたけど……。彼と、何かあったの？」
「え、いや、特に何もないよ」
「本当かしら？」
フィリスが、顔を覗き込んでくる。だが、返事をしてやれる気分じゃない。
「やっぱりおかしいわ」
「まだ一日しか一緒にいないだろ。どこがおかしいって言うんだよ」
「分かるわよ。口数も少ないし……」
「オレにだって、そんな日もあるよ」
「ふうん」
そういいながらも、彼女はなかなか信用してくれてないみたいだ。
ランスの言っていた、「関わらない方がいい」という一言が、頭の中でぐるぐる回っている。そのとき、村長と話していた時の「この力」という単語も思い出した。この力……魔法の事だろう？

「あっ！」
思わず声を上げ、オレはあわてて口をふさいだ。フィリスが訝しそうに見てくる。
思い返すと、ランスの言葉は少しおかしかった気がする。この力……？この？だって？　フィリスの魔法に対して言うなら、？あの力？って言うのが普通じゃないか？　それなのに、ランスは？この力？と言った。しかも、あの訴え方は普通じゃない。まるで、自分のことのように叫んでいた。そうだ。あれは明らかに、他人事ではなく、自分が助けを求めているかのように叫んでいた。
もちろん、言葉のあやというものかもしれない。けれど……。
「……」
気がついたら、目の前に、フィリスの黒い瞳があった。彼女は身を乗り出し、息がかかりそうな距離まで顔を近づけている。
「うわわわっ！」
いてて、尻餅をついてしまった。腰をさすりながら立ち上がると、フィリスは何が面白いのか、くすっと微笑みながらこちらを見ている。
「何を思いついたの？」
「思いついたというよりは……思い出した、かな」
これも少し違う気がした。だが、言い直す気もしなかったし、なにが正しい表現なのか分からない。
「ねえ、何を思い出したのか教えてよ」
これは、困ったな。ランスからは詳しい事を何も聞いていないし、そもそもランスが「関係ない」と教えてくれないような事を、オレがフィリスにあえて話す必要もない。同じ思いをさせるようだが……。
「教えない」
「えーっ」
「しかたないんだ。オレにもよく分からない」
「そうか、それなら仕方ないわね？」

ランスが戻ってきたら聞いてみようか。いや、やめとけ。
「昼飯はどうしようかな。とりあえず、ランスが来るまで待っていよう」
オレは、部屋に戻り、ベッドに倒れこんだ。

「ただいま」
疲れた声色でそういうと、オレはゆっくりとドアを閉めた。すると、フィリスが待ちくたびれたという風に声をかけてきた。
「あら？　おかえりなさい。やっと帰ってきたの？」
「ああ」
オレも同じ気分だ。やっと帰ってきた。結局、あの後も村の中をぶらぶら歩いていたからな。椅子に腰掛けると、テーブルに頬杖をつき、頭を乗せた。しばらくそうしてから、立ち上がった。寝るならベッドで寝よう。部屋に向かって歩き出した。
「どこに行くの？」
「部屋だ。少し、寝ていたい」
「そう。それはそうと、その部屋で今シェルスが眠っているんだけど」
えっ？　オレは我に返ると、じぶんの部屋ではなく、シェルス達の部屋のドアに手をかけていた。慣れ親しんだ部屋だから、無意識にそちらへ歩いていたようだ。
「……寝ぼけて間違えたようだな。フィリス、しばらくしたら起こしてくれないか？　……フィリス？　何してるんだ？」
「え？　ああ、夕食を作ろうと思って」
「何作ってるんだ？」
「スープよ」
「……朝飯と一緒か」
頭を抱えながら部屋へ向かうと、背後からあはは、と照れ笑いをするフィリスの声が聞こえてきた。

部屋に入り、ベッドに倒れこむ。本当に疲れた。バカみたいに歩き回っていたのもあるのだろうが、オレとしては考え事をしすぎて疲れた気がする。ふと、この位置関係は、今のオレの状況を表しているんじゃないかと思った。普通に過ごしているシェルスとフィリス。一人で抱え込み、隠しごとをしているオレ。

少し悲しくなった。耐えるんだ、ランス。今ここであいつらのことがバレたら、それこそ本当に悲しい結末を迎えるかもしれない。大げさに聞こえたが、どうでもいい。死ぬという事は、どんな時であれ悲しいものなんだ。オレは、あの時みたいに何も出来ず、周りの人間が死んでいくのは見たくない。そして、出来ればシェルス達にはそんな思いを、させたくない。

「……寝よう」

寝るといったくせに、目を見開いてる自分に苦笑しつつも、力を抜いて、ベッドに体をあずけた。……スープが冷える前に起こしてもらえるだろうか。

「うーんっ」

手を組んで上に伸ばす。そのまま反り返って、椅子ごと倒れそうになった。ドキドキする胸をおさえながら深呼吸する。

「あーあ、二人とも寝ちゃったわね。……退屈だわ」

何か面白いことはないかな？　少し、外に出てみようかしら。だめだめ、住ませてもらってるのに、二人に迷惑かけちゃやっぱりだめよね。ふう……。スープが出来てから、やる事がなくなっちゃったわ。どうしよう。

「寝顔でも、見てようかな」

シェルスとランス、どっちにしようかな。ランスの寝顔も見てみたい気がするけど……。やっぱりシェルスにしよう。ランスは、疲れてたみたいだし、起こしちゃ悪いと思った。わたしは、こそこそと部屋に入り、自分のベッドに腰掛けた。ふふ、シェルスはおきそ

うにないわね。
　しばらくの間、そのまま見ていた。ロウソクの明かりを髪が反射して、オレンジ色に染まっている。シェルスの髪は、ちらほらと赤い髪の毛が見えるけど、ほとんどわたしと同じ黒髪だ。
　すう……すう……。規則正しく聞こえる寝息。それにあわせて上下する胸。わたしはそっと毛布をかけ直してあげた。そこで、今なら添い寝しても平気だという考えが浮かんだ。けれど、頭を振ってその考えを打ち消した。またベッドに腰掛け、シェルスの寝顔を見る。なんとも思っていなかったけど、よく見たらシェルスは整った顔立ちをしている。今は眼を瞑っているし、上を向いているから横顔しか見えないけれど、それでもやはり整っていると思う。
　その時になって自分が、シェルスの顔をまじまじと見つめている事に、今更だけど気がついた。顔が赤くなる。
　そして、そろそろ二人を起こさないと、と思った。　……思った、だけだった。

「ふあああ……」
　伸びとあくびを同時にする。そういえばオレ、寝てたんだな。隣を見ると、フィリスが毛布もかけずに、ベッドに倒れてすやすや眠っている。幸せそうな寝顔だ。
「ああ……夜か？」
　外から物音がまったくしない。窓はなくても、それくらいは分かる。
　そっと部屋を出て、リビングに出る。テーブルの上には何もない。キッチンに行ってみると、スープの入った鍋があった。……朝食と同じメニューなのか？
「起こしてあげたほうがいいかな」
　部屋に戻ろうとして、ランスが帰ってきているか気になった。ランスの部屋をのぞくと、静かに眠っているランスがいた。どうせ起

こすなら、最後で良いだろう。先にフィリスを起こそうか。

フィリスは目を覚ますと、あわてた様子で言った。
「あ、あれっ？　わたし、寝ちゃってたの？」
「ああ、そりゃもう、ぐっすりと」
「……わたしが二人を、起こしてあげるつもりだったんだけどね」
「いいから、早く飯食おうぜ。ランスも起こして」
「うん」
部屋を出ると、フィリスがランスの部屋へ向かっていった。オレは、スープを火にかけていようか。ふああ、しかし眠いな。十分に寝れたわけじゃなさそうだ。
皿にスープを分けているとき、ランスが眠そうにやってきた。
「あ、おかえり。いや、おはよう。ええと、こんばんは？」
ランスはオレの冗談に呆れたような表情を浮かべ、椅子に座った。
「ちょうど温め直したところだ」
そういって皿を配る。スプーンはフィリスが用意していた。
熱々のスープを、ちびちびと飲んでいる時、オレはふと思い出した。そういえば、いろいろあって忘れそうになっていたな。
「なあ、ランス」
「なんだ？」
目は開いたものの、いまだ眠そうな声がかえってきた。
「鍛冶は、いつ教えてくれるんだ？」
「……あっ」
ランスは完璧に忘れていたようだ。思い出した瞬間、かなり驚いていた。
「すまん、忘れてた。いいぞ、教えてやる」
「よし！」
これでついに、剣を作れる……！　そう喜ぼうとした時、フィリスがこっちを見ていることに気付いた。
「どうした？」

「ええとシェルス、鍛冶ってここ、鍛冶屋なの？」
「そうだけど」
フィリスは改めて、家の中を見回している。だが、作業場は別にあるし、ここからは見えない。オレは待ちきれないという態度で、身を乗り出した。
「早速、明日くらいから教えてくれよ」
「分かった」
スープを飲み終わると、ランスは部屋へ戻っていった。また寝るのか。しかし、オレもまた眠くなってきた。皿を片付けると、のんびりと部屋へ向かった。

ロウソクを消し、ベッドに倒れこむ。さっき起きたばかりだけど、もう一度寝よう。
「ねえ、シェルス。鍛冶屋ってことは、剣を作ったりしてるの？」
「オレはまだ作ってないよ。ランスが全部やってるんだ。剣だけじゃなくて、他にもいろいろ作ってる。金属で出来ているものなら、いろいろ」
「ふうん」
そうだ。この際だから聞いてしまおう。森での、あの魔法について。
「今度はオレが聞くぜ。昨日の魔法、使う前に何か呟いてたりしてたけど、あれって何だ？」
「呪文よ」
「それはランスも言ってた。呪文って、どういうものなんだ？」
「あら、シェルス。魔術師になりたいの？」
「……気になっただけだよ」
だが、魔法に興味を持ったのも事実だ。あんなのを使えるようになれたらいいのに。
「えっと、魔法を使うには呪文を唱えなくちゃだめなんだ？」
「ええ」

「じゃあ、何も言わずに氷を飛ばしてたあれは？」
「ああ、あれは、魔法……ともいえるし、違うともいえるわ」
「どういうことだ？」
「あ、魔法だけど、魔術師が使う魔法じゃない。って言う方が正しいかな？　あれは、呪文は必要ないの。ただ、感じるままにマナを動かして……」
「ちょ、ちょっと。マナってなんだ？」
「目に見えないけど、そこらじゅうにあるエネルギーよ。これを動かして、魔法を発動するの」
「……」
「ふふ、むずかしい？　まあ、うまく説明できてないかもしれないけど……」
「ふむ。あれ、魔術師が使う魔法じゃないって、どういう……」
「それは、さっきも言った通り、呪文を使わないからよ。マナを動かすという時点では魔法といえるけど、魔術師は、呪文を唱えなければ魔法を使えないの」
「でもフィリスは、何も唱えてなさそうだったけど」
「うん、だって唱えてないもの」
「はあっ？　頭が混乱してきた……」
「ええとね、わたしは、呪文を唱えなくても魔法を使うことが出来るの。ファイヤーボールとかなんかは、ちゃんと呪文唱えたほうが楽なんだけど、あの氷とかはマナを直接動かした方が簡単なのよ」
　そういって、フィリスは氷の塊を出した。唐突に、手のひらの上に。そして、それは雪のようになって消えていった。
「こんな風にね。これくらいなら、呪文を唱えなくても簡単に出せる。というより、オオカミをやっつけた時のあれなんかは、あの魔法の呪文が存在しないの」
「え？」
「だから、？呪文のない魔法？なの」
「うう、もう分からないから聞くのをやめた！　さあ寝よう。おや

すみ」
「あはは、ごめんね。もし、魔術師になりたくなったら言ってね？
ちゃんと教えてあげるから」
「遠慮しとくよ」
「うん。おやすみ」
それにしても、頭を悩ませすぎて、頭が冴えている。魔法か……。
「……興味深い話だったよ、ありがとう」
新たな知識を得るというのは、やっぱり楽しいものだ。少なくとも本で読むより、今聞いた話は面白かった。気が向いたら、じっくりと聞いてみようかな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0204z/

忘れられた血統

2011年12月1日23時46分発行